



翠巒
Mini Press
第174号
2021/11/05

編集・発行
高崎高校新聞部

GPAで大健闘

物理部

8月28日にベイシア文化ホールで、ぐんまプログラミングアワード(GPA)が開催された。この大会には、物理部の高田悠希くん(1の6)が個人で出場するとともに、2年生の渡部翔太郎くん(2の3)と佐藤弘基くん(2の1)、伊藤俊介くん(2の2)、山本航紀くん(2の2)の4人で構成されたグループが参加した。高田くんは優勝、2年生のグループは入賞を果たした。

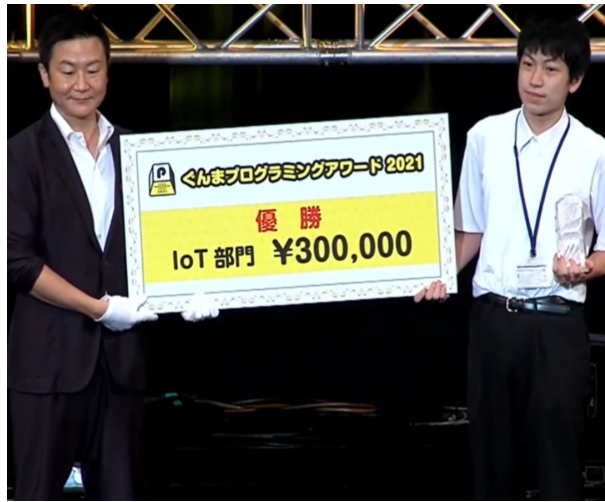
視覚障がい者を危険から守る

高田くん優勝

優勝した高田くんは話を聞いた。高田くんは今回製作した装置について、「視覚障がい者が使用する白杖に、障害物を認識するセンサーと周囲の状況を把握するカメラ、周

囲の画像を認識するAIを取り付けた。装置は『道しる兵衛』と名付けた。AIが車などの危険物や横断歩道、線路などの障害物を認識すると、音声で使用者に伝える。また、センサーが障害物を感知すると白杖が振動する仕組みになっ

ている。この装置を作ったのは、駅から離れた場所まで、視覚障がい者に対する整備が足りていないと感じたからだ。彼らが普段使用している白杖に工夫を施すことで、歩行中の安全を確保できるのではないかと考えた。盲導犬は費用がかかり、視覚障がい者への普及が進んでいないという現状を知ったことも製作の動機である」と説明した。また、優勝したときの気持ちについて、「信じられなかったが、自分のアイデアが認められたことは大変うれしかった」と語った。優勝賞金30万円の使い道について、「まだ決まっていない。しかし、将来的に新しいパーソナルコンピュータを買いたいので、そのために貯金をしようと思っ



優勝した高田くん



喜ぶ2年生グループ

吉野くん2連覇

校内ビブリオバトル

10月7日に本校の図書室で校内ビブリオバトルが行なわれた。ビブリオバトルとは、選手が順におすすめる本を紹介していく、最後に聞き手が一番読みたくなった本に投票するものである。今年のビブリオバトルには、1、2年生合わせて5人が出場した。その中で、『ミッキーマウスの憂鬱(著・松岡圭祐)』という本を紹介した吉野貴翔くん



本を紹介するバトルー

優勝した吉野くんは、「本の魅力を伝えることを意識した。あくまでも『本』に投票する形なので、できるだけパフォーマンス中心にならずに、本の面白いポイントを伝えるよう心がけた。その結果2連覇できて嬉しい。座右の銘が『辞は達するのみ』なのだが、改めてものを伝えることの嬉しさや楽しさを感じられた」と語った。さらに、県大会への意気込みについて、「昨年も県大会に出場する機会をいただいていたものの、予選敗退となってしまった。今年こそは予選突破し、チャンプ本まで駆け上がっていかれたらと思う」と口にした。(秋山)

※「吉」は「つちよし」。

おせち料理は駄洒落に満ち溢れている。「黒豆」には「まめに生きる」、「鯛」には「めでたい」、「こぶ巻き」には「よろこぶ」という意味がかけられている。正月という大事な年中行事に駄洒落を持ち込んでしまうのが、いかにも言葉遊びの好きな日本人らしい▼そうした日本人の中でも、特に言葉遊びを愛好していたのが江戸っ子である。彼らは駄洒落や逆さ読み、省略語などを駆使して、粋な会話を楽しんでいた。その洒落っ気は現在の日本語の一部に息づいている。たとえば、サザンカという花は元々カンザサという名前だった。それを江戸っ子が粋がって逆さに読んだことで、サザンカという名前が定着した▼現代の日本でつくられている大量の新語も、そうした自由で豊かな日本語文化の流れの中に位置づけることができるだろう。「ワンちゃん」、「草」といった省略語や、「エモい」、「メタい」などの新たな形容詞からは江戸っ子のそれと同じ、遊び心が感じられる。昨今、若者言葉を敵視する人も少なくない。だが、数百年前から日本人は言葉遊びに興じ、新しい表現を創り出してきたのである▼日本語は習得するのに必要な語数が多いことで有名な言語だ。その数は新語の誕生によってさらに増加している。日々更新され続ける日本語についていくのは大変だが、先入観を排し、遊び心を持って触れてみれば、それらを楽しいことでもできるのかもしれない。(宮前)

2年生チームも入賞

入賞を果たした2年生グループ4人のうちの、渡部くんと佐藤くんは話を聞いた。作った装置に関して、「換気を促すために、室内の人数と二酸化炭素濃度を測定する装置である。このアイデアを生み出すのに苦労した。また、自習室などに設置して、試運転をすることも大変だった」と述べた。入賞したときの気持ちについて、「自分たちのアイ

ている」と口にした。今後に関して、「センサーの精度が人々の命を守るのにまだ不十分であるため、今後向上させていきたい。加えて、人が

「あつたらいいな」と思うものを、技術を使ってこの世に『誰もが使える』状態で作り出し、多くの人のもとに届けたい」と意気込んだ。(横塚)

デアが評価され、何も賞を取れずに終わることがなかったため安心した。しかし、同じ物理部の先輩が優勝しているため悔しい」と話した。今後について、「別のコンテストに、この装置をベースにしたものを生かそうと考えている。また、二酸化炭素濃度が異常値を超える前に警告を出す機能も加えたい」と展望を語った。(横塚)

紙面割 表・青山 裏・根岸

「Maxありがとう」 24年の歴史に幕

2021年10月1日、日本で最後の2階建て新幹線、E4系新幹線（以下、E4系）がラストランを行なった。E4系は長らく上越新幹線を走っていたため、高校生にとって



越後湯沢駅に停車中のE4系

も、馴染み深い車両ではないだろうか。E4系は2001年から、上越新幹線での営業運転を開始した。愛称であるMaxは「Multi amenity express」を略したものである。

E4系はオーフル2階建ての8両編成であり、両先頭車において連結が可能である。連結時の定員は1634名と高速車両としては世界最大の定員数を誇っていた。そのため、需要に際して柔軟な対応ができる。その輸送力の高さによって、ラッシュ時の混雑

緩和に貢献してきた。しかし、登場から年月が経ったことや上越新幹線の最高速度が引き上げられることなどの、複数の理由によりE4系は引退することとなった。E4系の引退などについてJR東日本の運転士、後藤拓也さんに話を聞くことができた。後藤さんはE4系や、JR東日本におけるドクターイエローのような存在であるEastiなどの運転経験がある運転士だ。

— E4系引退、ラストランの感想は。
E4系は自分が思っていた以上に、多くの方々に関心を持っていただいていたのだと思う。新潟で生まれ育った私としても、新潟の新幹線は2階建てのイメージが強いので引退はとても寂しい。E4系はこれからも多くの人の心に残る新幹線であってほしい。

— E4系の引退、ラストランの感想は。
E4系は自分が思っていた以上に、多くの方々に関心を持っていただいていたのだと思う。新潟で生まれ育った私としても、新潟の新幹線は2階建てのイメージが強いので引退はとても寂しい。E4系はこれからも多くの人の心に残る新幹線であってほしい。

— E4系引退、ラストランの感想は。
E4系は自分が思っていた以上に、多くの方々に関心を持っていただいていたのだと思う。新潟で生まれ育った私としても、新潟の新幹線は2階建てのイメージが強いので引退はとても寂しい。E4系はこれからも多くの人の心に残る新幹線であってほしい。

秋という季節は、普段しないことに挑戦し新たな経験を積もうとする人が多くなる。ゆえに、この秋は多くの呼び名がある。その中でも、今の学生が注目し深く考えるべきは「読書の秋」だと思う。最近の学生は、読解力は低下し、語彙力が乏しくなっているそうだ。全国共通テストの現代文の得点がこのことを示しているのだ。スマートフォン（以下、スマホ）の画面を見ている時間の増加により、読書の時間を取りにくくなったことが原因の一つと

説論

秋と読書と経験

の労力を要する。そのため私たちは短時間かつ少ない労力で楽しめるスマホを使いがちである。しかし、読書は費やした時間以上の経験を与えてくれる。資産家を書いた「バ

がるといえる。他者の話は、自分とは異なる考えや物の見方を提示してくれる。多くの場合、これらは新たな発見を自分たちにもたらしてくれる。つまり、新たな考えや視点を

ピロンの大富豪」という本にもそう述べられている。もとより、文章を理解する力は、他者の言葉を理解する力である。つまり、この力は他人の話を理解することに繋



ディベートを学ぶ英語部員

英語ディベート大会 SSH4位・英語部も健闘

10月16日、群馬県内における英語ディベートの腕を競う雷神カップがオンラインで開催された。本校から英語部の2チームと、2年SSHクラ

SSHチームの引田裕太くん（2の1）は、「スピーキングの苦手を克服したいという軽い気持ちで参加した。事前準備が大変だったが、その甲斐もあり、自分たちが主導権を握って試合を展開することができた。特に自分たちの意見の軸となる立論を、ジャッジの方から褒めていただけてうれしかった」と述べた。さらに、SSHチームについて、「論理的に考える力が強いチームであった。また、向上心がとても強く、練習試合の後の振り返りを大切にできたことが好結果につながったと思う。さまざまな面でサポートして

速度が出てきたら、少し肩の力を抜く。もちろん運転状態では常に気を配り、何かあればすぐ対応できるようにしている。だが、余裕をもって運転すると、運転席からの素晴らしい景色も自然と目に入ってくる。皆さんも、勉強や部活で頑張るときは頑張り、仲間と楽しむときは思い切り楽しんで、メリハリのある高校生活を送ってほしい。

— E4系を最後に運転した時の感想は。
ブレーキや運転操縦の面で苦労した車両だったので、寂しい気持ちになった。しかし、各駅のホームで手を振っていただき、横断幕を作って見送ってくださるお客様を見て、E4系のすごさを改めて感じた。また、注目される中を運転することができて、運転士としてやりがいを感じた。E4系にとってもいい経験をさせてもらったと思った。

— E4系を最後に運転した時の感想は。
私はE4系の引退直前に、記念乗車した。その時に思ったのは、「男女問わず幼い子どもが多い」ということだ。やはり、E4系は老若男女から愛された唯一無二の新幹線なのではないだろうか。

SSHチームの健闘
SSHチームの引田裕太くん（2の1）は、「スピーキングの苦手を克服したいという軽い気持ちで参加した。事前準備が大変だったが、その甲斐もあり、自分たちが主導権を握って試合を展開することができた。特に自分たちの意見の軸となる立論を、ジャッジの方から褒めていただけてうれしかった」と述べた。さらに、SSHチームについて、「論理的に考える力が強いチームであった。また、向上心がとても強く、練習試合の後の振り返りを大切にできたことが好結果につながったと思う。さまざまな面でサポートして

SSHチームの健闘
SSHチームの引田裕太くん（2の1）は、「スピーキングの苦手を克服したいという軽い気持ちで参加した。事前準備が大変だったが、その甲斐もあり、自分たちが主導権を握って試合を展開することができた。特に自分たちの意見の軸となる立論を、ジャッジの方から褒めていただけてうれしかった」と述べた。さらに、SSHチームについて、「論理的に考える力が強いチームであった。また、向上心がとても強く、練習試合の後の振り返りを大切にできたことが好結果につながったと思う。さまざまな面でサポートして

SSHチームの健闘
SSHチームの引田裕太くん（2の1）は、「スピーキングの苦手を克服したいという軽い気持ちで参加した。事前準備が大変だったが、その甲斐もあり、自分たちが主導権を握って試合を展開することができた。特に自分たちの意見の軸となる立論を、ジャッジの方から褒めていただけてうれしかった」と述べた。さらに、SSHチームについて、「論理的に考える力が強いチームであった。また、向上心がとても強く、練習試合の後の振り返りを大切にできたことが好結果につながったと思う。さまざまな面でサポートして

（桑原）